

概 要

研究概要： 立命館大学生命科学部・薬学部・スポーツ健康科学部では、1～2回生の正課必修英語授業に、プロジェクト発信型英語プログラムを導入している。本研究では、同プログラムの統一的な評価基準作成にあたり、試験的に英語コミュニケーション力を測定するOPlc (Oral Proficiency Interview-computer) を用いて、プログラム受講により伸ばすことが出来る力を測定し、OPlc受験やプログラム受講に対する学生の認識調査を試みた。具体的には、1回生19名に対し、6月(Pre)と12月(Post)にOPlcを実施し、受験後の感想や授業との関連についてのアンケート調査を行った。PreとPostのOPlcのレベル比較の結果、大きな変化は認められなかったが、アンケートの記述から、OPlcは習熟度の低い学生でも緊張せず受験でき、学習意欲に結びつくことが示された。Postで明確な伸びが観察されなかった理由については、本プログラムでは、英語力だけではなく、学生が持っている様々な能力を駆使してコミュニケーションを成立させることに重点を置くその特異性にあると考えられ、継続的な観察の必要性が示唆された。

来場者コメント：以下の質問をいただきました。 1. 英語でのプレゼンに慣れていない学生は(授業でのプレゼンを)嫌がらないか？ 2. 授業で撮影したビデオの活用方法を教えて欲しい 3. アバターが一方向的に話すテストより、インタラクションのあるスピーキングテストの方が良いのではないか？ 4. アバターより人間相手の方が緊張しない学生もいるのではないか？ 和気あいあいとした雰囲気の中で意見交換が行え、有意義な発表となりました。

プロジェクト発信型英語プログラムにおける英語コミュニケーションテスト（OPIc）利用の試み

大賀 まゆみ（立命館大学） moga@fc.ritsumei.ac.jp

生駒 万貴（立命館大学） mikoma@fc.ritsumei.ac.jp

2016年6月12日（日）

第21回 関西英語教育学会（第21回）研究大会 口頭発表

本日の発表内容

1. はじめに
2. 本研究の目的
3. 研究方法
4. 結果
5. 考察／今後の課題
6. 参考文献

1. はじめに

- プロジェクト発信型英語
プログラム（PEP）と評価について
- OPlcについて

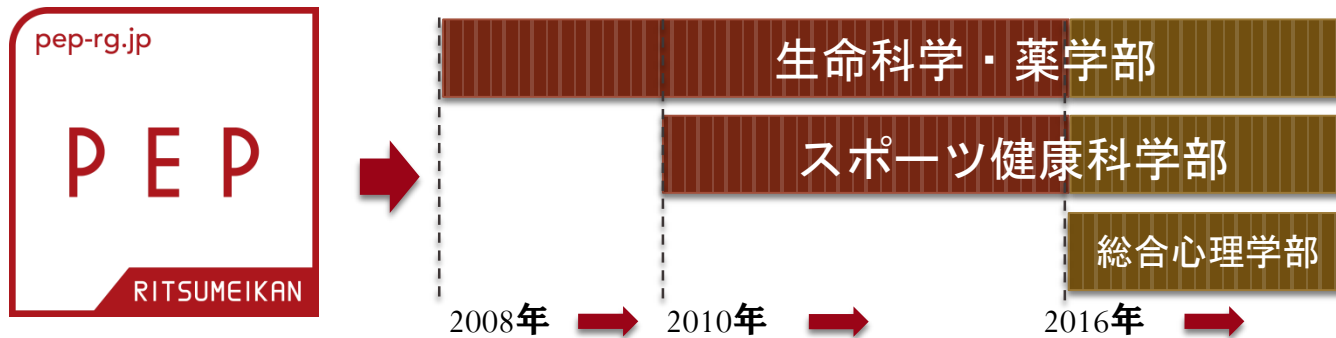
PEPとは

pep-rg.jp

PEP

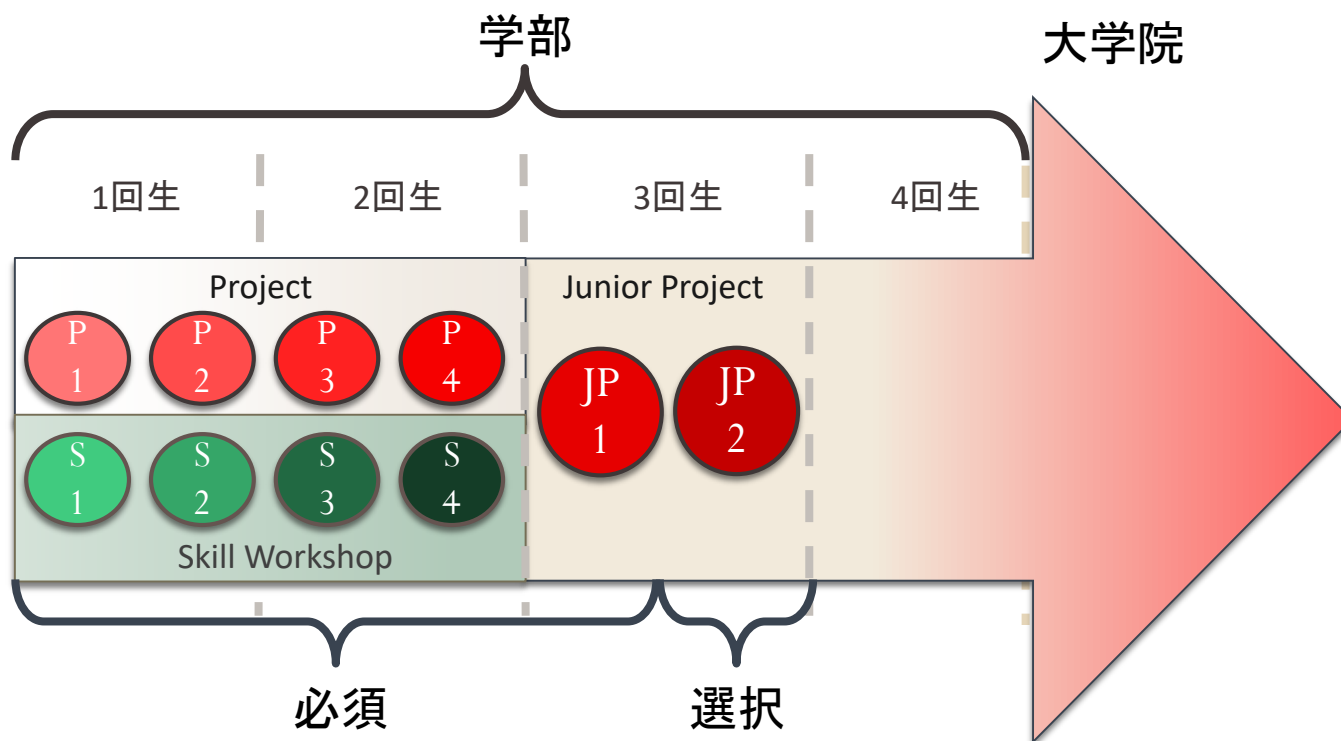
RITSUMEIKAN

- Project-based English Program = PEP
 - 鈴木佑治（慶應義塾大学名誉教授）が提唱



PEPとは

Project→情報発信に重点



Skill Workshop→4技能とオンラインワーク

PEPとは

pep-rg.jp

PEP

RITSUMEIKAN

全員がPC持参

授業	内容	発表形態
1回生前期	セルフアピール	個人
1回生後期	アンケート、インタビュー、マルチメディア資料を用いたリサーチ	個人
2回生前期	ディベート パネル・ディスカッション	グループ
2回生後期	アドバンストプロジェクト アカデミックリサーチ	個人
3回生前期	専門分野のテーマに基づくプロジェクト	グループ
3回生後期	自由	



PEP紹介サイト
<http://pep-rg.jp/>

PEP 評価基準の作成

英語運用能力



情報収集能力

課題発見解決能力

表現能力

論理的思考力



新しい評価基準(PEP-R)の作成

- ACTFLが開発した対面インタビュー形式の語学テストOPIをiBT (internet based test)形式で実現
- 実際の生活やビジネス場面で、どれだけ効果的で適切な言語を駆使できるかを測定するグローバル標準の英語コミュニケーションテスト
- 世界90カ国以上で導入され、現在までに約80万人を超える人が受験

ACTFL: American Council on the Teaching of Foreign Languages



対象言語	英語
テスト時間	約60分（オリエンテーション20分、テスト最大40分）
出題内容	Background Surveyを通じて個人に合わせた問題を出題 ➤ アバター相手に話す のトピック
評価基準	➤ 自分のことについて話す
問題数	➤ レベルが選べる
テストの特徴	➤ レベルの再調整ができる ➤ 問題毎の回答時間に制限なし
評価要素	● 高い利便性 ● Function/ Global Tasks(コミュニケーション継続能力) ● Text Type(文章構成力) ● Contents/ Context(状況に応じた表現力) ● Comprehensibility(質問意図の把握能力) ● Language Control(文法・語彙・流暢さ・発音) →一つの評価領域に偏らず、受験者の会話を総合的(ホリスティック)に評価 ※受験料:テスト1回あたり9,800円(税別)

ACTFLのガイドライン(2012)により7段階のレベル判定

Level		Level 略称	言語能力
Advanced	LOW	AL	自分の考えや経験を流暢に表現できる。討論や交渉、説得など実際の業務で駆使することができる。
Intermediate	Intermediate Mid = CEFR B1		大きな間違いが無く言語を駆使し、基本的なビジネス会議でコミュニケーションができる。
	MID	IM	小さな文法的ミスはあるものの、長いセンテンスを駆使して、基本的なコミュニケーションができる。 ※IM3(上)、IM2(中)、IM1(下)に細分化される
	LOW	IL	日常的な話題はセンテンスで話すことができる。会話に参加し、興味のある話題は自信を持って話すことができる。
Novice	HIGH	NH	簡単な単語や句を駆使してコミュニケーションができる。
	MID	NM	既に暗記している単語やセンテンスで話すことができる。
	LOW	NL	限定的ではあるが、単語を羅列して話すことができる。

OPIcとは



2. 研究の目的

1. プロジェクト発信型英語の評価として
OPIcは妥当か？
2. OPIc受験は情意面にどのような影響を及ぼすか？

3. 研究方法

- 期間：2015年度6月～12月

- 参加者：

立命館大学 生命科学部・薬学部・

スポーツ健康科学部 1回生 計19名

3. 研究方法

- OPIcテスト（Pre 6月/ Post 12月）の実施
- レベルアップした学生へのインタビュー
- アンケート調査の実施
（OPIc受験・授業の効果）

4. 結果

1. プロジェクト発信型英語の評価としてOPIcは妥当か？

4. 結果-OPIc

- Intermediate High → 8
- Intermediate Mid 3 → 7
- Intermediate Mid 2 → 6
- Intermediate Mid 1 → 5
- Intermediate Low → 4
- Novice High → 3
- Novice Mid → 2
- Novice Low → 1

Pre/Postレベル比較

No	Pre (6月)	Post (12月)	
1	4	5	1
2	4	5	1
3	5	6	1
4	3	4	1
5	4	5	1
6	3	3	0
7	3	3	0
8	4	4	0
9	4	4	0
10	2	2	0
11	5	5	0
12	4	4	0
13	4	4	0
14	3	3	0
15	1	1	0
16	4	4	0
17	4	3	-1
18	6	5	-1
19	4	2	-2
平均	3.7	3.8	

4. 結果-OPIc

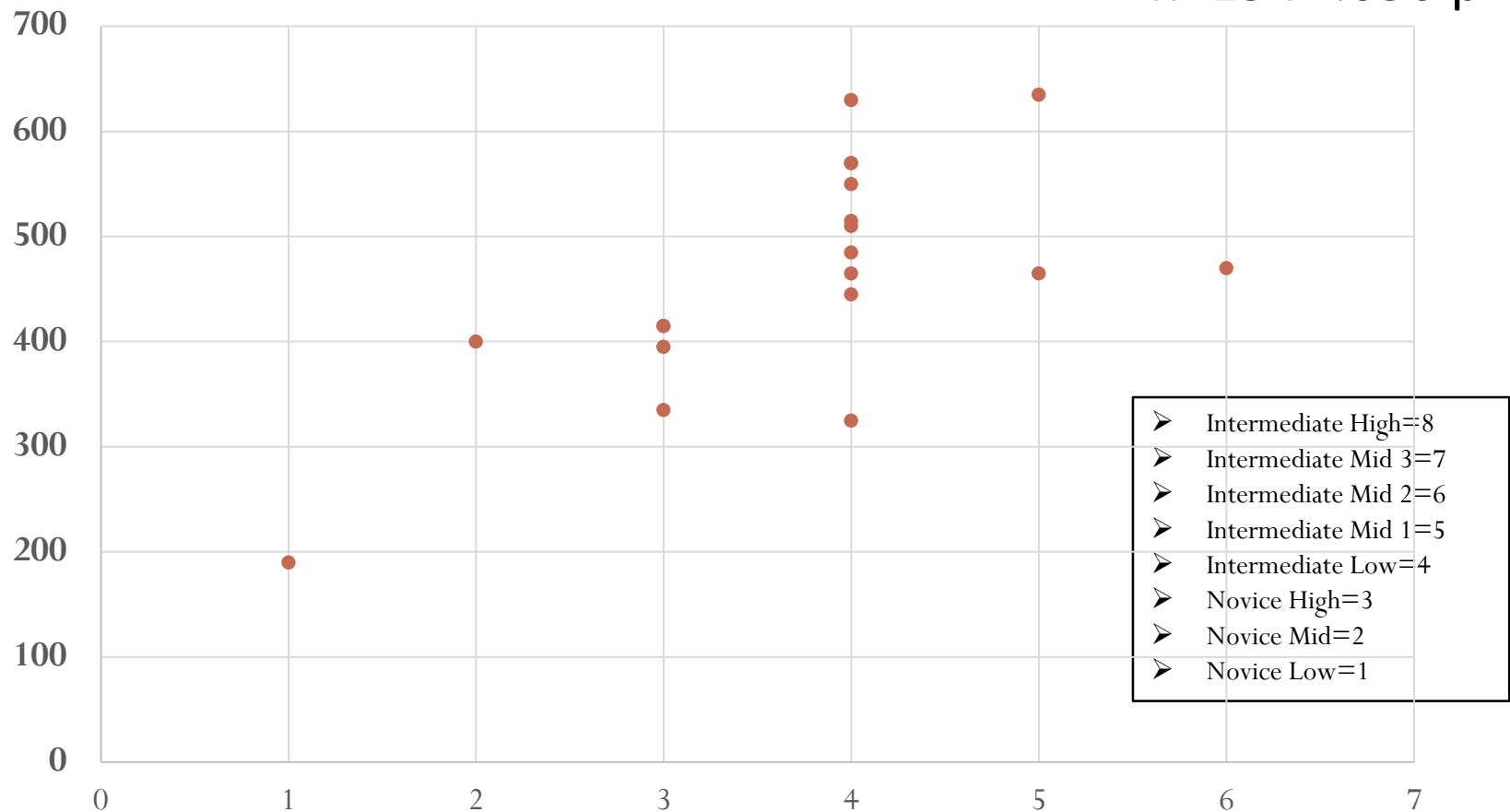
他大学のOPIc実施結果

大学名	クラス	n	プリ M	ポスM
A大学	工学部Mスカイプ	20	6.8	7.5
B大学	経済学部ゼミ生	30	5.8	6.2
B大学	3年次	19	5.6	5.9
B大学	同上卒業前	19	5.9	6.2
C大学	オンライン国際連携学習	13	4.8	5.2
D短大	教材統制スカイプ	23	3.4	4.7
D短大	一般スカイプ	19	3.1	3.3
D短大	海外短期留学	20	3.0	3.7
E大学	留学準備短期合宿	29	2.5	3.1

4. 結果-OPIc

OPIc/TOEICスコア分布 (pre)

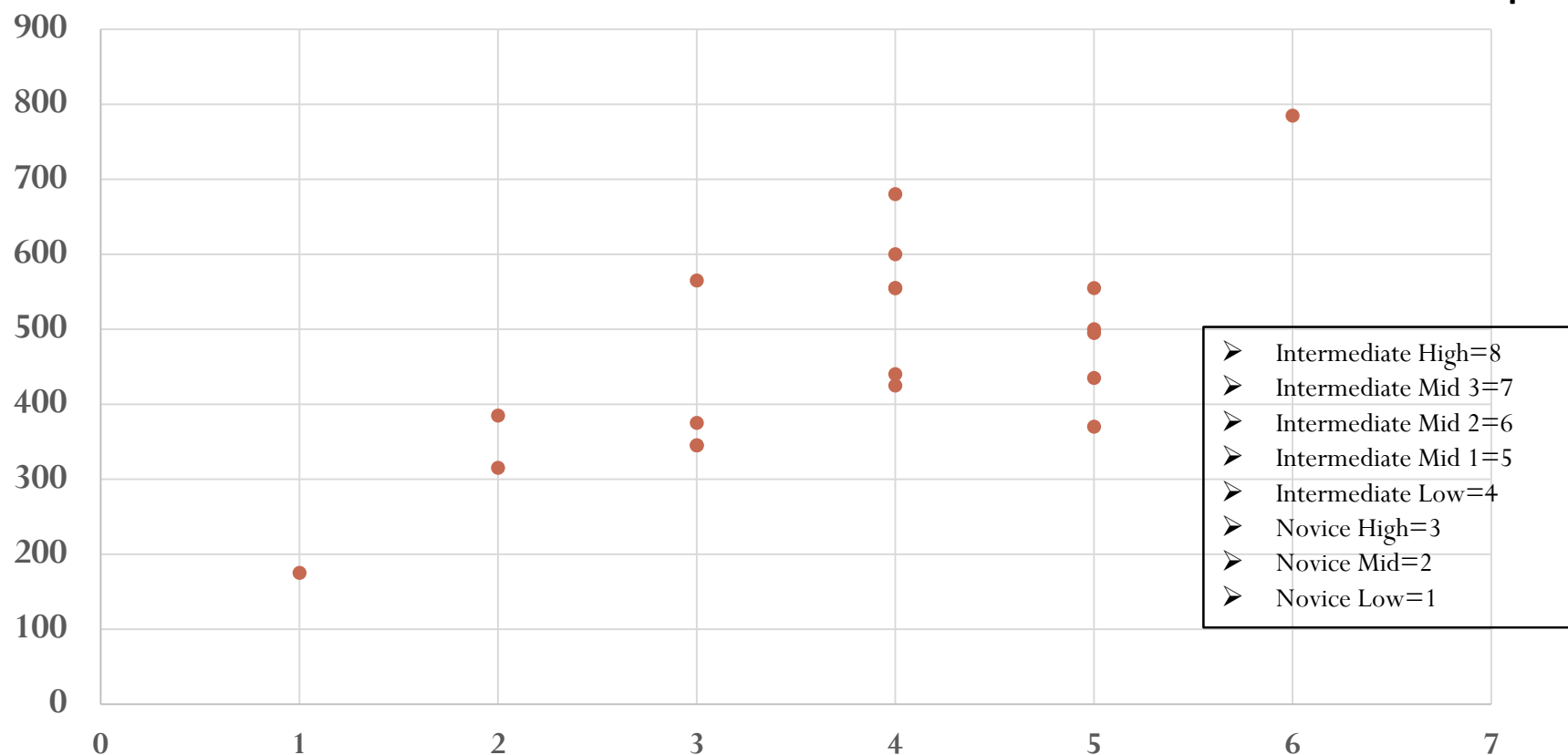
n=19 r=.656 p < .01



4. 結果-OPIc

OPIc/TOEICスコア分布 (post)

n=19 r=.688p < .05



4. 結果-アンケート

Q1. スピーキングの向上に以下の授業内の取り組みは効果があったと思いますか？

Q2. 授業を通じて、英語力以外にどのような力が身についていると思いますか？

4. 結果-アンケート

Q1. スピーキングの向上に以下の授業内の取り組みは効果があったと思いますか？

- グループワーク（発表・ディスカッション）
- モデレータ・チェアの実験
- 自分がプレゼンテーションすること
- クラスメートのプレゼンテーションを聞くこと
- 英語で質疑応答すること

4. 結果-アンケート

Q1. スピーキングの向上に以下の授業内の取り組みは効果が
あったと思いますか？

群別/全体の回答平均一覧

	グループワーク	モデレーター・チェア	自分がプレゼン	他人のプレゼンを聞く	質疑応答
レベルアップ群	4.4	4.8	5.0	3.6	4.8
ダウンまたは同じ群	3.8	3.4	4.4	3.4	3.9
全体	4.1	4.1	4.7	3.5	4.4

➤ とてもそう思う

5
4
3
2
1

レベルアップ群→モデレーター、プレゼンをやる、質疑応答
＝積極的にかかわる取り組みがスピーキングに効果的と回答

4. 結果-インタビュー

P=Project
S=Skill Workshop

Q. OPIcでレベルアップできた理由は何だと思いますか？

- 前後期のPの中間発表や最終発表の質疑応答が役に立った
- 試験に慣れた
- SのSmall Talkで即興で文章を考えて相手に伝える力を伸ばせた
- 後期に比べて、英語に焦点をあて、積極的に授業を有効活用したことによりレベルアップ
- Sと比べて、問題のレベルが速くなった
- 前回と比べて、問題のレベルを1つ下げたから
- Sで聞き取れるように毎回集中して必死に授業を受けた
- Pで堂々と話す力、単語力が身についた
- Pで他人のプレゼンを聞き様々な表現を学んだ

4. 結果-アンケート

Q2. 授業を通じて、英語力以外にどのような力が身についていると思いますか？

- マナー・礼儀
- 論理的にものを考える力
- 自分の意見を表現する力
- 人の意見をまとめる力
- 文献、記事、書籍などの資料・情報を探す力
- インターネットやコンピューターを使いこなす力
- 人前で話す自信
- オーディエンスの立場に立ってものを考える力

4. 結果-アンケート

Q2. 授業を通じて、英語力以外にどのような力が身についていると思いますか？

群別/全体の回答平均一覧

	論理的思考力	自分の意見表現	意見まとめる	情報収集力	ICT能力	人前で話す自信	オーディエンスの立場	マナー礼儀
レベルアップ群	2.8	4.4	3.4	3.8	4.2	4.4	3.8	3.6
ダウンまたは同じ群	3.6	4.1	3.1	3.9	4.1	3.9	3.6	3.5
全体	3.4	4.2	3.2	3.8	4.2	4.0	3.6	3.5

学習者それぞれが独自の学び

- とてもそう思う 5
- そう思う 4
- どちらでもない 3
- あまりそう思わない 2
- そう思わない 1

4. 結果-アンケート

2. OPIC受験は情意面にどのような影響を及ぼすか？

4. 結果-アンケート

Q1. OPIcは他のテストと比べてどう感じましたか？

Q2. レベルアップのためにOPIcを定期的に受験することは有意義だと思いますか？

Q3. 今後もOPIcを受験したいと思いますか？

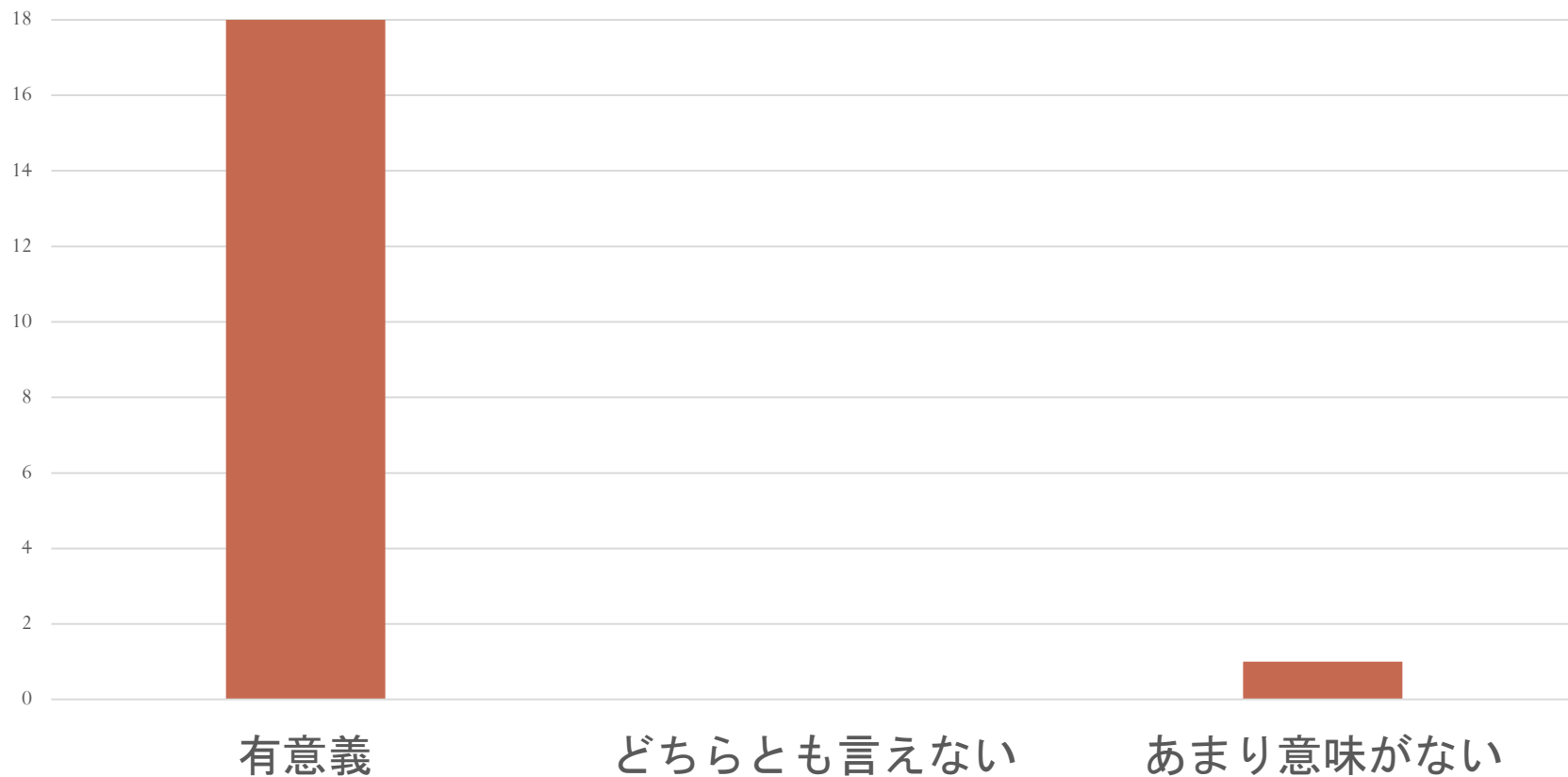
4. 結果-アンケート

Q1. OPIcは他のテストと比べてどう感じましたか？

- 「話しやすい環境」
 - ➡ アバター相手のため緊張が緩和
 - ➡ 自分に合ったレベルの選択
- 「楽しい・面白い」
- 「新鮮」
 - ➡ 自分のレベルの把握

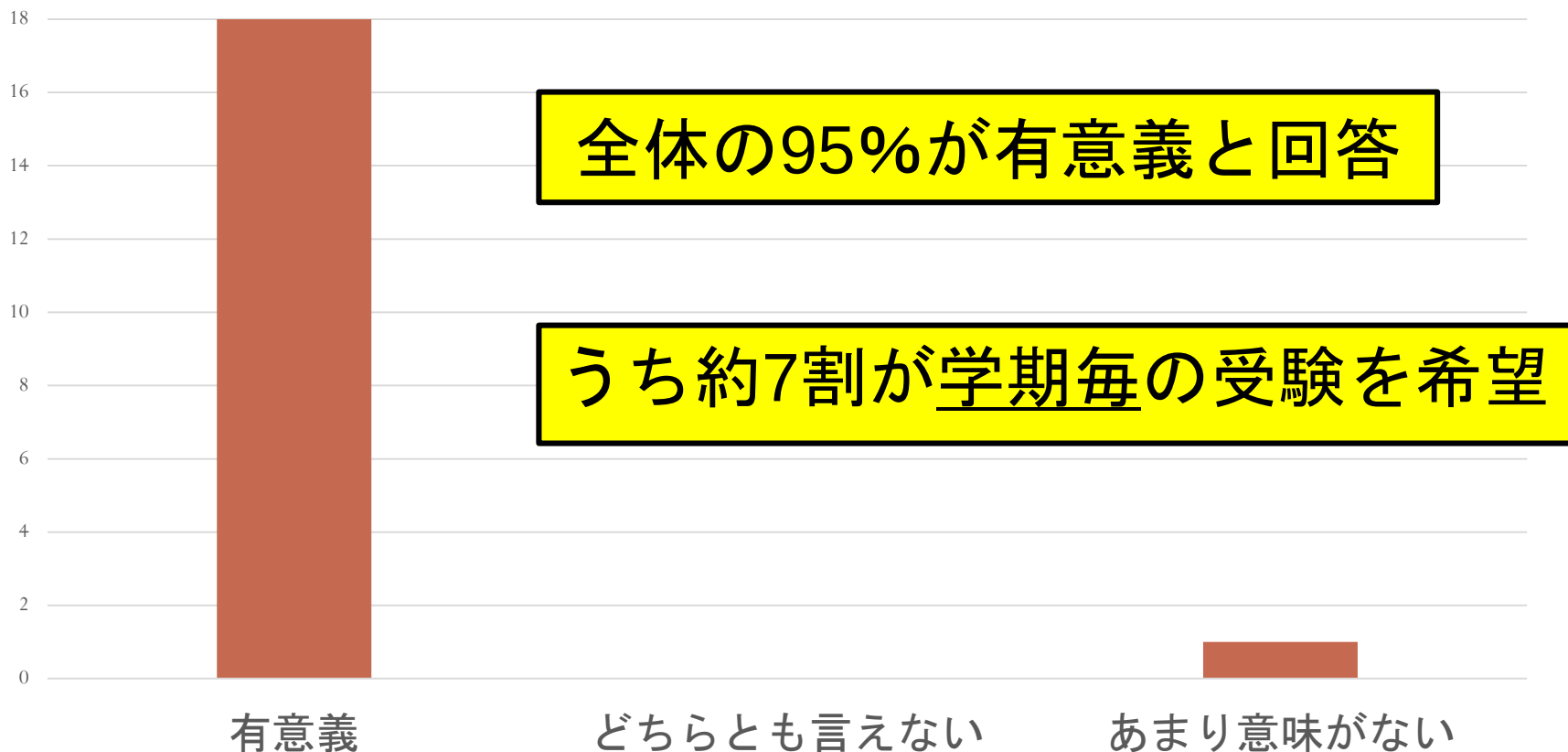
4. 結果-アンケート

Q2. レベルアップのためにOPICを定期的に受験することは有意義だと思いますか？



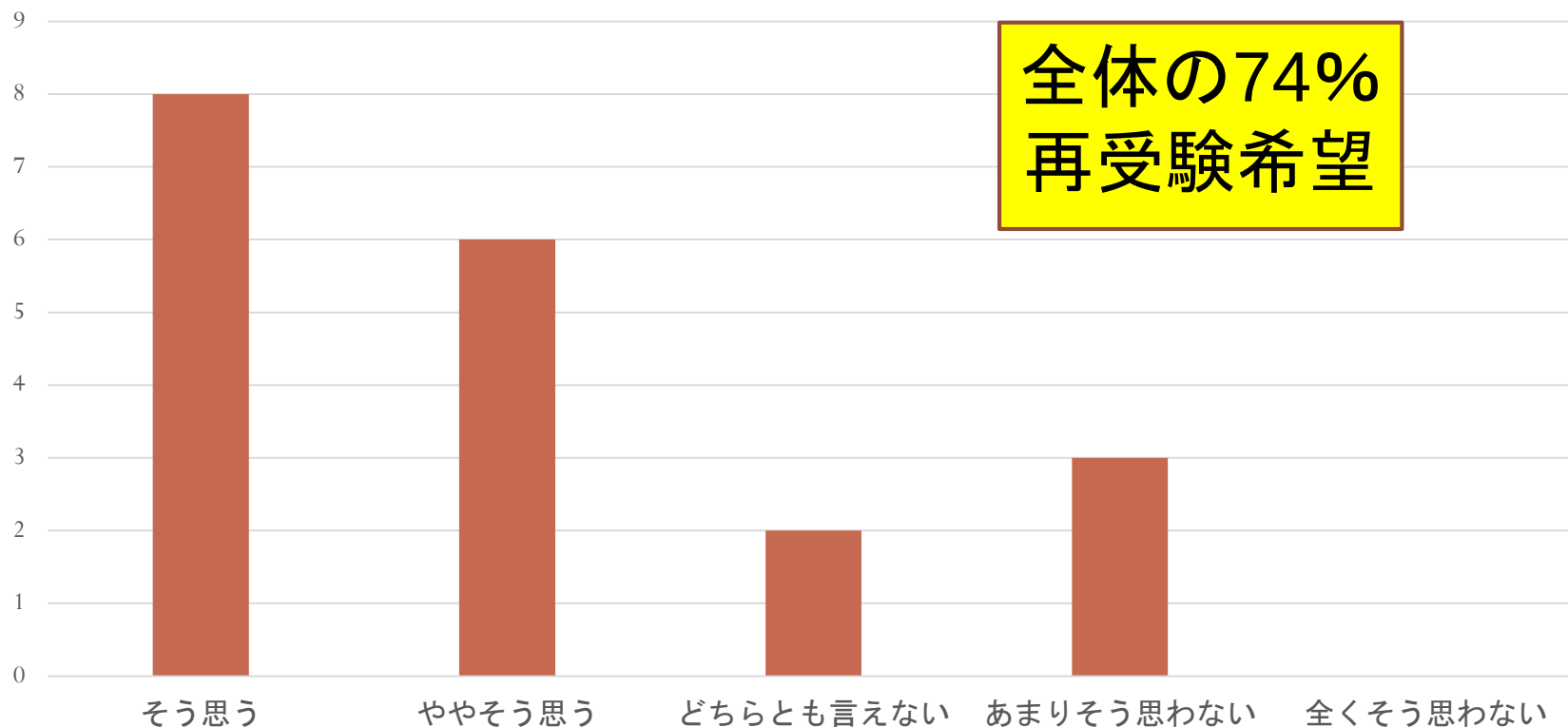
4. 結果-アンケート

Q2. レベルアップのためにOPICを定期的に受験することは有意義だと思いますか？



4. 結果-アンケート

Q3. 今後もOPICを受験したいと思いますか？



4. 結果-アンケート

Q3. 今後もOPIcを受験したいと思いますか？

- 自分の「スピーキング力」を把握できるから
- 「自身の成長」や「英語を話す重要性・楽しさ」を発見できたから

「ダウンまたは同じ群」の学生：ポジティブな意見

5. 考察・今後の課題

1. プロジェクト発信型英語の評価としてOPIcは妥当か？



英語力？

学習者それぞれが独自の学び

継続的観察

評価基準の作成

プログラムのさらなる改善

5. 考察・今後の課題

2. OPIC受験は情意面にどのような影響を及ぼすか？

アバター・自分の興味あるトピック・レベル選択



ポジティブな回答

レベル把握



コミュニケーション力の
重要性

フィードバック
の重要性

学習意欲
の増進

6. 参考文献

NECマネージメントパートナー (n. d) 英語コミュニケーション力を測定するOPIC
Retrieved 2016. 5. 29 from
<https://www.neclearning.jp/opic/index.html>

鈴木佑治 (2010) 立命館大学生命科学部・薬学部 「プロジェクト発信型
英語プログラムー Project-based English Program」の
理論的基盤と実践 立命館高等教育研究 10号

八木 智裕 (2016) 英語スピーキング能力の可視化によるプログラム適用効果の
考察 ーレベルの傾向分析と産学連携で考えるグローバル人材
へのステップー 日本英語教育学会第46回年次研究集

山中 司 (2010) 大学英語教育手法としてのプロジェクトの評価
2005年度慶応義塾大学政策・メディア研究科博士論文